

前にもお話したことがあると思いますけれども、私には中学2年生の息子がおります。今は私よりも大きくなりまして、元気に育っておりますが、小さい時は、よくケガをしたり、病気をしたりしました。まだハイハイしていた時のことですが、ストーブに手を突っ込んで大やけどをしたこともありました。また、犬と遊んでいて、突然犬に咬まれて血だらけになったこともありました。あるいは、40度近くの熱を出して、ウーウー唸っていた事もあります。そういう時、親としては、出来ることならば、自分が代わってあげたい。こんなに苦しむのであれば、自分が代わりに、その苦しみを負ってあげたい、そんなふうに思う訳でありますね。

しかし、看病はできても、その苦しみは代わってあげられない。それが現実であります。病気やケガだけではなく、その人が負わなければならない重荷、生まれながらの障害とか、あるいはいろいろな試練なんかでも、それは、その人、本人が引き受けなければならない、そういうことも沢山ある訳であります。頭が痛い、お腹が痛いからといっても誰も代わってあげることは出来ません。運転免許を取るのでも本人が練習をしなければならない訳であります。勿論、学校の試験だって同じであります。それは、親が、あるいは、他の誰かが代わってしてあげられるという、そういう性格のものではありません。本人が、それを引き受けなければならない訳であります。先程、読んでいただきました聖書の言葉は「めいめいが、自分の重荷を担うべきです」という言葉ですが、そういう現実が私たちにはある訳であります。

ところで、聖書に、このような言葉があるという時、皆さんはどんなことを思いますでしょうか。めいめいが、一人一人が、自分の重荷、自分の問題を担っていかなければならない。ちょっと違和感を感じるという人もいるかも知れません。だって、聖書は、神様、イエス様は、私たちが救ってくれる、助けてくれる、そんなことを教えているからであります。イエス様の「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11:28)という有名な言葉、皆さんも知っているかも知れませんね。「重荷を負って苦労している者は、誰でも私のもとにきなさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」なんと慰めに満ちた言葉でしょうか。イエス様が私たちの重荷を負ってくださる。重荷を軽くしてくれる、助けてくれる。それ故、安らぎが得られる。この言葉によってどれだけの人がイエス様を信じたか分かりません。聖書は、確かに、私たちの救いを説いているのであります。たとえ私たちに重荷があっても、イエス様がそれを共に担ってくれる。そして、私たちに安らぎを与えてくれる。

しかし、よく考えて見ますと、イエス様は決して私たちの重荷を「すべて負ってくれる」とは言っていないのであります。イエス様は、私たちの重荷を軽くはして下さいます。でも、私たちの重荷をすべて取り除いてくれるとは言っていない。むしろ、イエス様は「あなた方には世で苦難がある」(ヨハネ 16:33)とはっきり語りますし、また「私について来た

い者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(ルカ 9:23)と、自分自身の十字架を背負うことを教えているのであります。その人が担わなければならない重荷、十字架、それはその人自身が負っていかなければならないものもあるのであります。他の人がどんなに代わってあげようとしても、どうすることも出来ない、そういう重荷もあるのであります。

キリスト教は、愛の宗教、救いの宗教、赦しの宗教、恵みの宗教であります。神さま、イエス様は、私たちを愛してくださいます。救ってくださいます、赦してくださいます。助けてくださいます。しかしながら、それは、何をしても赦されるとか、願い事は何でもかなえてもらえるとか、重荷はすべてなくなるというような、そういうことでは決してないのであります。特に、私たちの重荷、それは決して「すべてが取り除かれる」というようなものではない。重荷は誰にもあるのであります。

「まばたきの詩人」と言われております水野源三さん。9歳の時に、集団赤痢によって、脳性マヒにかかり、言葉と体の自由を失い、以後寝たきりの人生を歩みました。源三さんは、13歳の時、神様の愛に触れ、イエス様の恵みを知り、洗礼を受けてクリスチャンになりました。しかし、クリスチャンになったからといって、重荷がなくなった訳ではありません。1984年、47歳で亡くなるまで、源三さんの病気は癒されませんでした。病気になって、手足を動かすことも出来ない、体を動かすことも出来ない、言葉も話せない、人の手を借りなければ何も出来ない寝たきりの生活、それは死ぬまで変わりありませんでした。源三さんの負わなければならなかった重荷は生涯取り除かれはしなかったのであります。最後まで、その重荷を担わなければならなかった。

しかし、源三さんは、神様の愛に支えられ、イエス様に助けられて、最後まで神様から与えられた人生を生き抜きました。源三さんが「まばたき」で作った「生きる」という、こんな詩があります。

神さまの大きな御手の中で
かたつむりは かたつむりらしく歩み
蛍草(ホトグサ)は 蛍草(ホトグサ)らしく咲き
雨蛙(アマガエル)は雨蛙らしく鳴き
神さまの大きな御手の中で
私は 私らしく生きる」。

源三さんは、大きな重荷を抱え、ハンディーを負いながらも、「私は、私らしく生きる」と、その重荷を受け入れ、精一杯生き抜いたのであります。

自分の重荷、それは自分で負うしかありません。誰にも代わってもらえないのであります。しかし「めいめい、自分の重荷を担いながら」、神様に助けてもらって「私は私らしく生きる」という、そういう生き方をして行ければと思うのであります。誰でも重荷から解放されたいと望みます。しかし、担うべき重荷は担いながら、「私は、私らしく生きる」、そんな歩みが出来ればすばらしいなあと思います。